

権力の「背信」

写真は2018年6月刊行の話題の書。著者は朝日新聞取材班、副題は「森友・加計学園問題」スクープの現場。

「もりかけ疑惑」に関心があり、新聞をスクラップしてきたが、こうして一冊にまとめられた本書を読むと、記憶が一本の線として繋がってくる。紹介したいことは多いが、取材と報道に関わってきた二人の言葉だけを紹介したい。

公権力の不正や構造的な腐敗の疑いと向き合って、事実を掘り起こし、裏付け取材を重ね、報道機関の責任において疑惑や問題点を報じる。今回の一連のスクープには、そうした「調査報道」に区分されるものが多い。当局の情報に依拠できない分、小さなミスが命取りとなり、信頼性を失う恐れがある。緊張を強いられるが、権力監視の役割を果たすには欠かせない報道のあり方でもある。

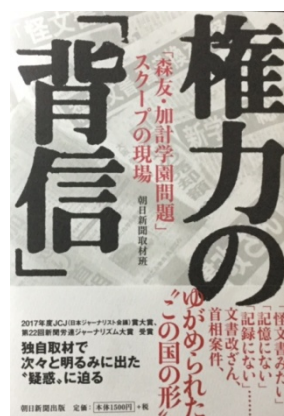
財務省はなぜ国有地を格安で売却し、文書の改ざんによって何を隠し、何を守ろうとしたのか。国家戦略特区で獣医学部新設が認められるまでの手続きは、真に公平・公正なものだったのか。幕引きを図りたい政権側の思いとは裏腹に、いまだ真相は解明されず、疑惑も底が見通せない。

森友・加計問題は、いまの政治の奥深くに横たわるさまざまな課題が、ほんの少しだけ表に顔を出した「氷山の一角」ではないのか。逆にいえば、森友学園・加計学園をめぐるさまざまな問題を表に出して報じることで、その根元にある大きな政治の課題を正していくことにつながるのではないかとも思うのだ。実際、一連の報道を機に、公文書管理のあり方を考え直そうという議論が与野党で始まっている。

政治や行政が、主人公である国民のために公平・公正に行われているのか。国民に事実が明らかにされているのか。私たちジャーナリズムの存在意義は、ここがなおざりにされていないかを常に監視し、疑問があれば解き明かしていくことにあると考える。そうである限り、私たちはこれからも取材を続けていくのだ。

本書を読んで、あらためて新聞というジャーナリズムのあり方、「調査報道」の大切さを考えさせられた。

それとともに、本書から「もりかけ疑惑」に共通する問題が見えてくる。ひと言でいえば、安倍首相夫妻による政治の私物化であり、それを支える政治や行政の構図である。とりわけ取り巻き連中の忖度と隠蔽など、目に余るものがある。これだけ「証拠」が上がっているのに、安倍政権という「岩盤」をなぜ突き崩せないのか。それをメディアだけでなく、ひとりの国民である自分自身にも問いかけたい。



(2018年9月4日)